

いても、主要な要因は刺激項目の表記形態（漢字／平仮名）×イメージ価（高／低）であった。また、被験者はすべて大学生であった。

第5章では、文字言語記憶における視覚的情報の機能を明らかにするため、6個の実験を実施した。以下、主な3つの実験について記す。

[実験1] 方向付け課題として刺激項目のコバート (covert)・リハーサルを課したところ、低イメージ語で表記形態の効果がみられ、漢字表記項目の方が仮名表記項目より再生成績が優れていた。

[実験3] 方向付け課題として刺激項目の音読処理を課したところ、実験1と同様の結果が得られた。

[実験4] 実験3と同様の方向付け課題を遂行させ、遅延再生を課した。その結果、高イメージ語でも表記形態の効果がみられ、漢字表記項目の方が仮名表記項目よりも再生成績が優れていた。

これらの結果から、単語再生における視覚的記憶痕跡の機能に焦点を当てたモデルが提案された。

第6章では、表記の熟知性が文字言語記憶に及ぼす影響を明らかにするため、外来語を材料として1個の調査と5個の実験を実施した。刺激項目の表記形態は片仮名もしくは平仮名とした。以下、主な2つの実験について記す。

[実験7] 実験3と同様、方向付け課題として刺激項目の音読処理を課し、片仮名表記項目と平仮名表記項目の再生成績を比較した。その結果、表記形態間で成績に差はみられなかった。

[実験8] 実験7と同じ方向付け課題を用いて遅延再生を課したところ、表記形態の効果が生じ、平仮名表記項目の再生成績が片仮名表記項目を上回った。

これらの結果から、音読処理を課した場合には、表記の熟知性が低い項目の方が再生成績が優れることが示された。これは、第5章でみられた漢字表記項目の記憶における優位性が表記の熟知性に起因するものではないことを示している。

第7章では、音声言語記憶における視覚的情報の機能について検討した。以下、主な2つの実験について記す。

[実験12] 方向付け課題として聴覚刺激項目の意味が理解できたらボタンを押すように求め、リスト呈示終了後に視覚的再認テストを実施した。その結果、正棄却数で仮名表記テスト項目の方が漢字表記テスト項目よりも優れることが示された。

[実験15] 聴覚刺激から漢字イメージを生成させたところ、実験12と同様の結果が得られた。

以上の結果から、漢字連想記憶モデルが提唱され、その説明力が吟味された。

最後に、第8章で論文全体の総括を行い、今後の漢字政策に対する若干の提言を行った。

## 筑波大学

### 心理学博士

中山勘次郎 「児童における動機づけ志向性が個人的・社会的事態での達成行動に及ぼす影響」

本研究では、児童の達成行動に積極的に関与する社会的動機づけの存在を明らかにし、またこの社会的動機づけと課題解決過程への動機づけとが、どのように児童の達成行動に影響を与えているのかに関して、実験的場面から日常の教室場面までの広い範囲にわたって分析された。

このため、Nakamura & Finck (1980)を参考に社会志向性・課題志向性という2つの動機づけ志向性が概念化され、その測定尺度が作成された。さらに、両志向性の相対的高低にもとづいて、両志向性とも高い群(HH群)・社会志向性が優位な群(HL群)・課題志向性が優位な群(LH群)および両志向性とも低い群(LL群)の4群に児童を類型化する方法が提出された。

こうして概念化された社会志向性・課題志向性の基礎的妥当性を確かめるため、学習への動機づけに関する従来の諸概念、特に内発的動機づけや有能感への動機づけ、達成関連動機、および目標理論に関する諸概念との関連が検討された。相関データによれば、両志向性と有能感や達成動機とは、各スキル領域ごとに強く関連しており、学業達成領域における自己評価の高さに対しては、社会志向性も積極的な関与を示していた。このほかHL群の達成関連自己概念からは、おとなへの依存を基礎とした達成傾向と、評価懸念の存在が示唆された。

次に、仲間集団や教師との相互作用をとまなう課題解決場面において、社会志向性・課題志向性が児童の行動や認知に及ぼす影響を検討するため、競争的・協同的学習に対する一般的な態度や、実際の共同課題解決場面における行動、教師からの影響の認知、さらには日常の交友関係における行動が分析された。それによればHH群は、競争的学習を強く選好し、共同課題解決場面でも共同者に対して主導的であり、教師からの情報を敏感に受容しようとするなど、仲間との相互作用や教師からの影響に対して最も積極的・主導的であった。一方HL群は、共同課題解決場面では親和的な働きかけが多く、相互信頼的で緊密な友人関係を形成しているなど、より親和的・友好的な態度や行動を示していた。対照的に、LH群は教師や仲間との相互作用への関心が低く、自律的な達成を志向していた。またLL群は、特徴的な結果は少なかったが、学習活動全般に対して最も否定的・消極的な

態度をとっていた。

さらに、他者からの評価場面における児童の達成行動や認知が、自己評価場面や自律的達成場面と比較しながら分析された。このため、母親からの評価や、友人との社会的比較情報に対する態度、能力評価場面での目標設定行動、親和的の手がかりをとる評価場面での学習効果について検討が加えられた。その結果、最も特徴的だったのはHL群とLH群との対照的な反応である。HL群は他者からの評価による影響を受けやすく、また達成不安の高い課題では、他者からの親和的の手がかりにもかかわらず、評価によって学習が阻害される傾向が見られた。これに対してLH群は、他者評価に依存せず、自律的・自己決定的な達成場面に強く動機づけられることが認められた。また、HH群は評価場面・非評価場面のどちらでも適応性の高い達成行動を示し、場面に応じてその行動を柔軟に変化させていることが示唆された。

様々な場面において、各群の達成行動や認知にはそれぞれ独自の特徴が認められ、それらは場面の違いを超えて一貫性の高いものであった。内発的動機づけや達成動機理論から予測される達成行動がHH・LH群の達成行動として区別されたほか、評価懸念の影響なども同定され、社会志向性と課題志向性との組み合わせによって、児童の達成行動をより広範に理解し得ることが確認されたと言えよう。

最後に、本研究結果の教室場面に対する意義と示唆について述べるとともに、残された問題点や今後の検討課題について考察された。

## 筑波大学

### 心理学博士

星野喜久三 「情緒的表情の識別に関する発達の研究」

本論文は8章より成る。第1章では、Darwinの表情理論以降の主要な表情理論が概観され、諸理論中とくにIzardの分化情緒理論、顔面フィードバック仮説が重視されている。結論として、著者によれば、顔面表情とは、それが不随意的であれ随意的であり、定型的な顔面筋肉群の働きによって情緒を表出し、それを相手に伝達する一種のシンボルである。第2章では、まず、基本的情緒の諸理論が概観され、次に、著者の仮説として、顔面に明瞭に表出される基本的情緒11種類（喜び、怒り、悲しみ、驚き、興味、恐れ、楽しみ、不満、軽蔑、嫌悪、羞恥）が選定され、それぞれの表出特性が記述されている。

第3章では従来の表情理解に関する発達の研究が広く展望され、第4章では著者による従前の2つの研究と、それらの研究方法を改善した研究計画が記されている。実験材料として、先の11種類の情緒の標準的的表情写真(カ

ラー)44枚が1,430枚(表出者130人)中から選定された。これらは、44人の成人男性22人、女性22人から成り、いずれも表出の適切性、明瞭性、自然性を十分に具備したものと判定された。実験手続として、それぞれの表情写真が“どんな気持を表わしているか”を被験者に自由に命名させる情緒命名法(EL)と、配置された5枚または6枚の写真の前に実験者の指示する表情を被験者に当てさせる情緒再認法(ER)が設定された。

第5章では、2歳から18歳にわたる619人(男子322人、女子297人)による表情識別の結果と、それについての考察が述べられている。(1)男子、女子の表情識別得点はELならびにERにおいて年齢と共に増加していた(発達勾配は十分に有意であった)。ELの年齢への回帰は直線的であり、ERのそれは曲線的(拋物曲線的)であった。(2)ELの正答率は、2歳(24%)から5歳へかけて急増し、以後漸増傾向をたどり、12-13歳から横ばいになり、17から18歳(85%)へかけて再度急増していた。ERの正答率は、2歳(43%)から5歳へかけて急増し、以後漸増傾向をたどり、13歳で96%に達し、以後18歳(99%)まで横ばい状態が続いた。(3)ELとERをまとめて、識別され易い順に、第1位 喜び、怒り、悲しみ、第2位 驚き、第3位 興味、恐れ、第4位 楽しみ、不満、第5位 軽蔑、嫌悪、第6位 羞恥が得られた。(4)ERのもとでみられた表情識別混同の資料にもとづいて、表情間類似性についてクラスター分析がなされ、6つの表情群が分類された。識別の混同にもとづいて各表情の類縁関係を示す表情尺度がつくられた。これは、I喜び、II楽しみ、III羞恥、IV嫌悪、V不満、VI軽蔑、VII怒り、VIII悲しみ、IX恐れ、X驚き、XI興味であった。この推定尺度値と実測値との相関は.94であった。この表情尺度はWoodworth, Schlosbergのそれと異なっていた。(5)正答率(66%以上を基準とする)と識別混同率の資料にもとづいて情緒の分化図式が作成された。6歳児において羞恥以外のすべての基本的情緒の分化がみられた。(6)11表情全体では識別力に性差はなく、表情×性ではEL、ER共楽しみについて男子は女子に優り、嫌悪について女子は男子に優るという注目すべき結果が得られた。(7)ELまたはERと知能、学力との相関は有意であったが、低かった。

第6章では、分裂病者群、躁うつ病者群、痴呆性疾患者群、アルコール依存症者群、第7章では精神遅滞児群、自閉症児群それぞれによる表情識別力が正常者群のそれとの比較において検討されている。各種精神病者群では、全体の識別水準は正常者群より劣るが、“喜”、“怒”、“哀”、“驚”の原初的情緒の識別水準は正常者群と同じであり、また11表情の識別順序も正常者群と同じであった。精神遅滞児群(CA=11:3, MA=3:9)の識別水準は正常2